



回転させたい程の強い抵抗を感じていたのでした。けれどそれも、経験者にはおわかりでしょうが、あの激痛の前に敢えなく降参となり、夫、娘たち、年老いた両親等に、助力を頼まなくてはならない入院という事態を迎えてしまったのです。とにかく安静にしていなければならぬということのみこめるまでに何と多くの時間がかかったことでしょう。お産以外で入院などしたことのない私にとってそれは大事件だったのです。

結果として、その入院生活によって私は失うことよりもかえって多くのことを学び得たのですが、落ちこんだ気分を回復するには予想以上に長い時間を費やし、ようやくこの頃になって気分を高揚させることができ始めたところです。

当時、私としては反省すべき所が多々あり恥じ入っていました。不思議なことに、家族も友人も知人もほとんどそういう点に触れず、ひたすら親切にそれぞれのできる限りのことをしてくれたのは多少の驚きでもあり、嬉しくもありました。ひょっとして、私は無意識の内に

そういう親切を期待して、その原因を自ら作っていたのかもしれないとさえ今では思えるほどに、私は不思議な幸福感に浸っていました。

まず、第一に、高校一年生になっていた長女はちょうど夏休みということもあり、私に代わって一切の家事をこなした上に、片道一時間の道のりを一日おきに病院へ通って来てくれたことがあげられます。これは私の想像以上のできごとでした。正直なところ私はそこまでは長女に期待していませんでした。私はこの際とばかり、長女に甘えるだけ甘えて遠慮なく注文を出し、退屈しのぎの本を持ってきてもらったたり、洗濯物を頼んだり、一番安心して頼むことができたのです。しかも長女は頼まれないことで私の喜ぶことを幾つもしてくれて、ほとんど毎日張り切って料理をし、好き嫌いの多い次女にはいろいろな工夫をして嫌いなものまで食べさせ、きちんと家計簿をつけて私の期待以上の黒字にしてみました。おまけに私はそんな長女を誰彼となく自慢することの喜びまで手に入れたのでした。私は主婦として

の自分の地位が脅かされる危険を感じるよりも、日頃、目にするのでできなかつた長女の成長ぶりを知って母としてむしろ誇らしく嬉しく思つて実に幸福でした。

それに比して五歳年下の次女の方は、専ら子ども扱いされて嫌いなものを無理矢理食べさせられ、引き立て役という損な役回りで、病院に来ては、「早く返つて来て」と甘えて行くので、この子のためにも早く良くならなくてはと思わせてくれる有難い存在なのでした。

その頃、夫は職場でも管理職として多忙を極めているにもかかわらず、住居のマンションでも管理組合の役員として、ほとんどの週末さえ仕事に費やしていました。私の通院入院に当たっては、ほぼそれらに最優先で付き添つてくれました。これでは夫の方が倒れてしまわないだろうかと心配し、私はどこか心の隅でそういう夫に詫びていたものの、夫婦が余りにも別々の時を過ごしていることの多い日本の生活に対して、私自身秘かな不満が高まっていたことに改めて気づかされたのでした。夫が付き添つてくれたり、見舞いに来てくれたりするこ

とにとまどいや照れのようなものを感じながらも、それは私には嬉しい事であり、恐らくは私が無意識の内に最も期待していたことなのでしたから。

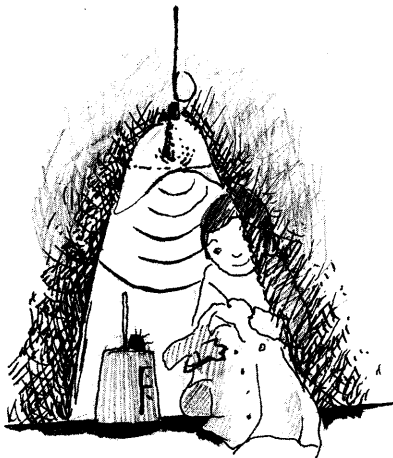
入院という大事にまでなると、親類や友人の見舞いがあり、日頃何の事件もなく平穩に過ごしている時には会えないような個人的なつながりの人々が向こうから訪ねてくれて、その表面的な装いや表情の奥にある本物の心を透かして見せて行つてくれたばかりでなく、自分の方も、真に求めて会いたい人の姿がはっきりしてくるようでした。痛みはいくら激しくとも生命の危険のない気楽な入院生活であつた私は、その時、誰を最も必要としていたか、あまりにも当たり前にも、私の家族、夫と二人の娘たちであつたことを悟つたのでした。アメリカで生活していた時には、実家や友人たちから切り離され、祖国から切り離されてむしろ自分が両親や母国といかに深くつながっていたかということを感じ知らされたそのように、私はこの入院によつて今では自分が夫や長女とどれほど深くつながっていたかということを感じ知らされ

たのでした。けれどその頃私は、自分だけがその家族から取り残されたように感じていたのでした。それが世話をする立場から、世話を受ける立場へと逆転して、取り残されてはいないということを確認することができたのでした。

私の姿勢は、それまでの気負いが、心身共に取れて、「休め」の状態になっていました。その間に私は自分の肉体的な「老い」に対して、じっくりとしかも前向きに考える時を持つことができたように思います。老化を絶対に認めたくないという頑なまでの「若さ」への執着が少しずつ、行きつもどりつしながら解消していききました。長女や夫に労わられることの快感が、若さを失いつつあるという痛みを和らげてくれたのです。そればかりか、若さを失うことの方にばかり気を取られ、それと共に得てきたものが私の目には見えていなかったことに気づき始めてもいました。ほとんど止まってしまったようなゆったりとした時の流れの中で、私は、もっと年若い人のこと、病床の人のこと、身体の不自由な人々の心

の一端に触れたように思いました。

その頃甘えん坊の小学生だった次女も今は中学生となりました。彼女が中学生になった途端、又しても私は、自分の中学時代を物差しにして、次女の自立を促し始



め、待てない自分の性懲りのなさにあきれっていますが、今度は長女がしっかり口をはさむので対立、対決の構図にならず、むしろ私には面白く、ゆとりさえ感じています。今はそういう娘二人とのダイナミックな関係を大いに楽しんでいる私です。

長女が中学生だった頃、私はしきりに自分自身の中学時代と比較しては、長女のすることなすことを、自分の中学時代を理想モデルとして、批判的に見る事が多かったものです。それにはいくつかの点で無理があったはずですが、そう納得することが当時の私には困難だったのです。まず、時代の違いということがあるにもかかわらず、私に見えてくるまでにあまりにも多くの時間がかかったこと。自分自身のことでも、記憶にだけ頼っているのに、理想化し過ぎる面のあることを容易に無視しがちであったこと。そして最も大切なことは、長女は、私ではなく、全く別の一人の人格であることをつい忘れそうになることでした。長女のことは私が一番よくわ

かっているという自負が強過ぎたのです。私は長女が中学を卒業し高校生になるまで、それらのことを頭ではわかってはいるつもりで、心から納得することはできずいたのだと思います。私の入院は私の長女からの分離を果たすのに大きな転換点となりました。それは、私の方からなされた分離独立宣言だったのかもしれませんが、彼女はそれに全く良く応えてくれました。

一方、父と娘の間は更にその一年後に、長女の側から問題がつきつけられ今に到るまで解決していかないようです。

私は入院によって降参し、自分の生き方にはつきり節目を作ることになったのですが、夫の方はあい変わらず、働き過ぎの毎日という生活に変化は起きていません。夫は父を亡くしたり数々の試練を経てもなお大筋でそれまでの強いイメージのままでした。さすがに「疲れた」という言葉は連発し続けていたものの、管理組合の方もやめるにやめられない状態のままでした。ところが、昨年の夏、突然に、今度はヨーロッパに事務所を開

設することになったのでその準備にすぐにも単身で行くようにという話を持ち上がったのです。それから一か月もたつたかないかの内に夫は赴任して行き、今もその状態が続いています。長女は進路の選択に当たり、強過ぎる父親の影響がその不在によって軽減され、これまでより自由に振る舞っています。それまで私の方から尋ねてもなかなか本当の希望を言わなかったのに、気楽に事ある毎に自分から話してくれるようになりました。

夫は、私の心配をよそに、ひたすら日本の猛烈ビジネスマンの道を歩み続けていますが、娘たちと私は束の間の休息を得ています。私は、それが長女にとって進路決定の大事な時期であったことを喜びながら、単身生活をすることやヨーロッパの人々の生活を見聞することによって、夫が自身の生き方や家族である私たちに対する期待を少し変えて、もっと柔軟になってくれることを期待しています。去年の九月に出発して行って、たった三か月で年末年始の休暇に一時帰国した時、すでに相当の変化を見せて私たちを驚かせた夫ですから、この期待は

実現する可能性大だと思っています。

いずれ夫と生活するため私もベルギーへ行くことになりましょうが、長女は一緒に行くことになるのかならないのか今は全くわからなくなってきました。

思えば十年前、アメリカへ家族四人で旅立った時も、七年前に帰国した時も、再び外国で生活することになるうとは少しも予想していなかった私たちです。それにしても世界の変わり方の速さはますます加速しています。アメリカから帰って以来の日本社会への再適應の困難な過程をふり返ると本当のところ、今度のベルギー行きは、外国が初めてではないという利点を考慮しても、決して心はずむ期待ばかりでなく、緊張と不安が高まり、増していくものです。

日本社会の閉鎖性ということが最近とみに外国から指摘されるようになっていますが、それは日本の内側からだけ見ていると気がつきにくいもののようなのです。と言うより気づいていながら変革を望まないのだと言った方が

よいのかもしれませんが。私のように外国で暮らして再び日本で暮らすことになった日本人の家族の数は今でもほとんど増えているはずですが、そういう人々の声が十分に生かされているとは言い難いのが現状のようです。帰国したばかりの頃は、私も思わず口に出して言っていたことを七年もたつ内に次第に言わなくなってきましたが、それは口に出しても大勢には何の影響も与えられなばかりか変わり者扱いされて、無視されたり、かえって反発を受けたりする苦い体験を重ねることによってそうなっていくのです。

新しい考えが提案されても、それはただ新しいからという理由で試みることさえ封じてしまう仕組みが、この社会にはできあがっていないでしょうか。家族が共に過ごす時をふやすためには私が確信している学校の週休二日制にしても、もっと積極的な意味を母親たちに見出してほしいものだと思いますが、多くの母親はそのマイナス面ばかりを理由にあげて、本音の反対理由を隠そうとしています。最近、ほんの一部で週休二日制が

試行され始め、思った以上に家族や母親にプラスの効果があったと聞きました。新しいアイデアが提案されたら、私たちはもっとその良い効果を期待するように考え方を変えていくことが、もう少し必要なのではないのでしょうか。マイナス面を強調して慎重にとらうばかりではいけないというのが外国からの言い分のような気がします。リスクの多い初めての事業には、外国の方々へお先にどうぞといつまでも言っていられないほど日本はお金持ちになってしまったのです。

そしてその前に、全く新しい考え方をものをひとりひとりが提案することができるようしていくことが求められています。独創性と言うことです。そのためには、まず、新しい考え方もっと気楽にいくつでも表明してみることでできる開かれた雰囲気私たちの周りに作っていくことが大切だと思います。その点では、私たちは子どもたちから多くのことが学べると思います。幼稚園や学校で、他の子どもたちとは違うユニークな発想をする子どもを、先生や保育者は大いに励まし勇気づけ

てほしいと思います。新しいことに挑戦する時には、次に起こる事態の予測で悲観的な方向に傾きがちであるわけですから、できるだけ多くの樂觀的予測を、共に出し合っていくようにするといいかもしれません。アイディアの創始だけでなく、予測についても、子供たちの方が優れているということがあり得ると思います。先入観を捨て、とにかく新しい考えを、今までにない方法をと発想し、それを表明する機会を豊かに保証していくことが、何よりも出発点にならなければなりません。

例えば、神奈川県では、オートバイの三ない運動という高校の規則が、逆転の発想によって、安全教育をすること、本来の目的である無事故を目指すことになったというニュースがあります。ここでも、一律にそのように転換するには、学校によっては準備も心構えもできていない所にとまどいが生じているということですが、教師だけで実行しようとするばかりでなく、警察やPTAはもちろん、生徒自身を参加させて共に方策を探っていくとすれば予想以上の進展があり得ると思います。

子どもの発想力を評価するというのは、しかし、決して楽な道ではありません。大人も全身全霊で応じていくことを要求されるからです。けれど、世の中の流れは、ソ連や東欧で起きている大変革に見るように、大きな意味ではつきりと見えてきたことが、いっそう多くの人々に実感されているのではないのでしょうか。これまで弱者の立場におかれてきた老人、子ども、女性、心身障害者等の力が見直されてきています。地球規模での環境破壊が問題にされ始め、人間以外の生き物にもその目が向けられ始めました。全世界で起こっているすべての事象は、大きな全体的な意味においてひとつにつながっているということがこれほどはつきりとそれも個々人のレベルで自覚され、目に見えるようになってきた時代はなかったのではないのでしょうか。

日本の政府が規制緩和を求められているように、既存の秩序や枠組みがあらゆる所で問い直されていると見るべきでしょう。その意味で日本の教育界、学校という社会は見直されるべき最有力候補であると思うのですが、



どうでしょう、中学、高校なども校則の上にあぐらをかいていられるのでしょうか。

長女の中学時代、PTAの役員をして感じたことでも忘れられないことがあります。私は自分で取り立てて新しいことをしたつもりはありませんでしたが、「前例のないことだから」という理由で、委員会で話し合い決定した事項を覆されたことがあります。私はその時よりやく私の提案や実行の幾つもの前例のないことだったのだと気づきました。手続き上の不備や内容的な問題点を指摘されるのならともかく、前例が問題になるとは、私は驚きの余り絶句してしまいました。それは私の未熟さ、政治力のなさというものであったかと今では思っています。PTAにしろ、組織といふもののいったん硬直した時の恐ろしさを見た思いがしたのでした。下積みをつつこつこなし、階段をひとつひとつ登るようにして、組織内で人脈を養いながら次第に重要なポストについていくというやり方をしない限り、意見や提案そのものの正当さだけでは通用しないというのが日

本のあらかたの組織のあり様であるのなら、そのことが今は外国から批難されているのではないかと思えます。幼稚園や学校は、世界の動きを先取りする形で理想をかかげ、それに向かって歩んでいくことのできる子どもを育てることを目標にしてほしいものですが、組織というもののがちな硬直性を思う時、学校に期待するよりもむしろ、素早く変化に対応していける家庭や個人の生き生きと生活できる時間と場所をふやしていくことに力点をおくべきなのではと思うのです。